

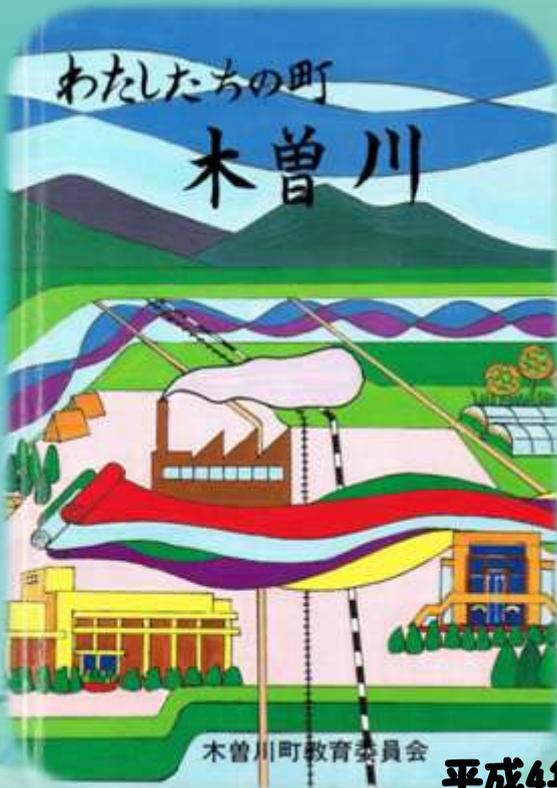
ふるさと

今昔



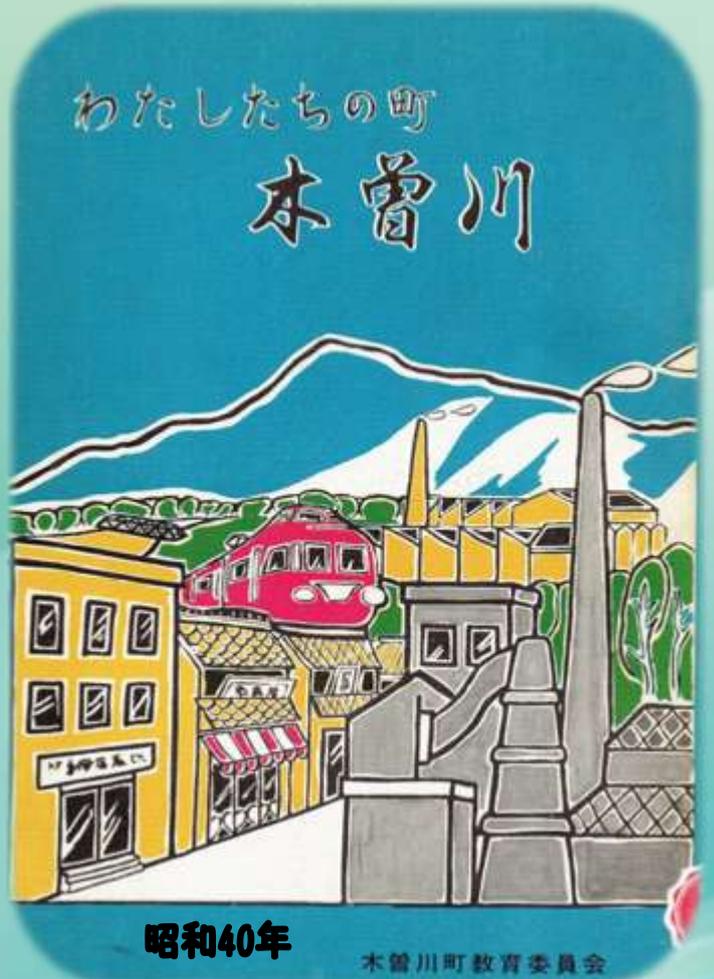
昭和53年

木曽川町教育委員会



木曽川町教育委員会

平成4年



昭和40年

木曽川町教育委員会

木曽川町連区地域づくり協議会

令和元年7月発行

《ふるさと今昔^{いまむかし}》の配布によせて

木曽川町連区地域づくり協議会では、30年度を初年度とする3ケ年計画提案事業として

1. 安全で安心なまちづくり事業
2. 思いやりのあるまちづくり事業
3. 地域の歴史・文化を次世代に継承する事業
4. 地域づくり協議会の認知度アップ事業

の4つの事業に取り組んでいます。(詳細はHPをご覧ください)

このうち、「3. 地域の歴史・文化を次世代に継承する事業」の趣旨並びに具体的な活動につきましては次の通り考えています。

私たちは地域の自然や歴史・文化等が大切なことを分かってはいても、それらに心を寄せる機会を持つことは少なくなりがちです。そこで、私たち自身の啓発を図るとともに、特に将来を担う子どもたちが、地域の自然・歴史・史跡・名勝等を学ぶことにより「ふるさと」を知り「ふるさと」を愛する気持ちを育む一端となることを期待して、以下の活動を行います。

- ①木曽川町の自然・歴史・文化などを冊子・パネルで紹介
- ②木曽川町の自然・歴史・文化などを教育に反映
- ③流木アート制作・展示

そして、上記①の「木曽川町の自然・歴史・文化などを冊子・パネルで紹介」活動として、今回、冊子《ふるさと今昔》を町内全世帯に配布するものです。この冊子に取り上げた写真は、かつて作られた副読本『わたしたちの町木曽川』を活用し、そこにある写真と対比した「昔と今」の視点を取り込んでみたものです。従いまして、木曽川町の自然・歴史・文化のすべてを紹介するものではないことをご理解いただきたくお願いします。また懐かしの写真として、「昭和初期の雀のお宿等に関する写真」を加えました。なお、パネルにつきましては、木曽川庁舎、アピタ木曽川店、イオンモール木曽川にて展示しています。

【参考にした文献等】

『わたしたちの町木曽川』(木曽川町)、『木曽川町史』(木曽川町)、『のびゆく一宮』(一宮市)、
『ふるさと一宮』(郷土出版社)、『一宮、尾西、木曽川いまむかし』(名古屋郷土出版社)、
『木曽川町と鎌倉街道』(木曽川町)、『没後60年 川合玉堂』(一宮市博物館)、『今もいきる 濃尾地震』(中部建設協会)、尾西歴史民俗資料館 春季特別展「濃尾地震」、『愛知県災害誌』(愛知県)、
現地にある案内文、関連HP並びに Wikipedia

特に『木曽川町史』は大変役に立ちました。写真コメントの多くは木曽川町史から引用させてもらいました。先人の方々のご苦勞・ご尽力に敬服いたします。

目 次

A. 新旧対比写真

(自然)

- 1. まわりの山々 P1
- 2. 木曾川との闘い P2
- 3. 濃尾地震 P3
- 4. 二重堤防 P4
- 5. 伊勢湾台風 P5

(社寺・旧跡)

- 6. 伊富利部神社 P6
- 7. 籠守勝手神社 P7
- 8. 賀茂神社(玉ノ井の泉あと) P8
- 9. 護国神社 P9
- 10. 河野善龍寺 P10
- 11. 法蓮寺(妙見さま) P11
- 12. 宝光寺(お地蔵さま) P12
- 13. 黒田城あと P13
- 14. 門間の野井戸 P14

(交通・産業)

- 15. 木曾川駅(JR) P15
- 16. 新木曾川駅(名鉄) P16
- 17. 旧国道22号 P17
- 18. 国道22号 P18
- 19. 銀座通り P19
- 20. 繊維産業のあゆみ P20~21

(公共施設)

- 21. 町役場 P22
- 22. 学校教育 P23~24
- 23. 消防組織 P25
- 24. 木曾川病院 P26

B. 懐かしの写真

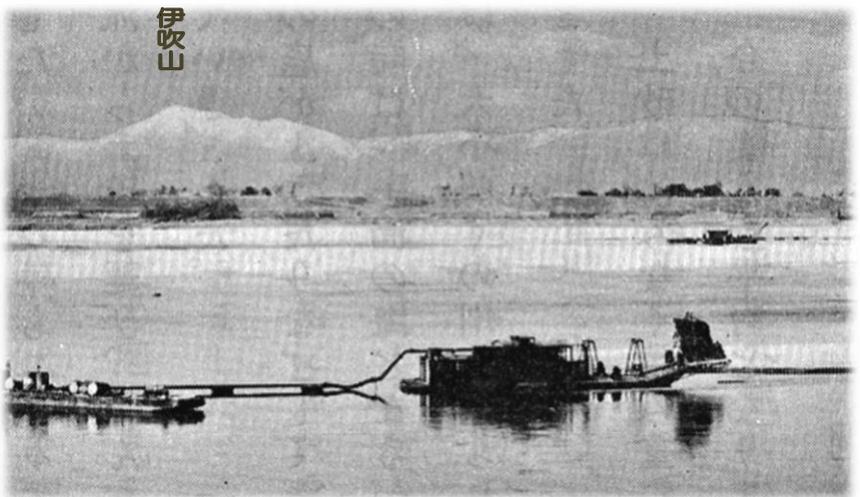
- 25. 雀のお宿&木曾川河畔 P27~29
- 25-1. 雀のお宿 恵那 P30~31
- 25-2. 柳原白蓮・北原白秋・竹久夢二など P32

C. 資料

- 26. 木曾川町の神社と寺院 P33
- 27. 木曾川町の文化財 P34
- 28. 方言と共通語比較 P35~36
- 29. 見取図 P37

1. まわりの山々

木曽川町の西方面には伊吹山が見えます。高さは1377mあり日本百名山に数えられています。山頂のお花畑とともに山麓の薬草栽培も有名です。ドライブウェイがあり山頂近くまで車で行くことができます。伊吹山の左手（南側）には養老山地が連なっています。養老公園や多度大社があります。また養老山地の中ほど奥に見えるのは鈴鹿山脈です。なお養老山地と伊吹山の間にある平たい山は南宮山で、南宮山の右奥が古戦場で名高い関ヶ原になります。



北には金華山が見えます。山頂には岐阜城がありロープウェイで行くこともできます。岐阜城は織田信長の居城として有名です。金華山の右手（東側）には各務原の低山や中濃の山々が連なります。天気の良いときには北東方面に御嶽山が見えます。御嶽山の高さは3067mでももちろん百名山の一つです。2014年の秋に噴火があり63名の方が犠牲になりました。

東にはおまんじゅうのような恵那山が見えます。高さは2191mで美濃の最高峰です。やはり百名山になります。その右手前から南へ尾張の低山（尾張富士や本宮山）や猿投山が連なります。

南方面には山はなく平地が広がっています。一宮の市街地ビルや名古屋の高層ビル群も見ることができます。平地の先は伊勢湾に続いています。

【日本百名山】作家で登山家の深田久弥が山の品格・歴史・個性等の観点から選んだ百山をいいます



2. 木曾川との闘い

長野県の鉢森山を源流とする木曾川は、犬山のあたりから急に平野に流れ出ます。そのため、大昔にはそこから多くの川筋に分かれて流れていました。昔の木曾川の本流は、現在の境川すじに近く、前渡付近から西へ流れ笠松の北側を通して墨俣の付近で長良川と合流していました。また、その長良川はさらに揖斐川と合流していました。

木曾川は尾張と美濃の国境になっていて、川すじの移り変わりによって国境もつねに移動しました。特に天正 14 年（1586）の大洪水では本流が大きく南下し、川島・笠松・竹鼻などの村は尾張から美濃の管轄へと替わりました。



天正の大洪水を受けて、秀吉の時代にお囲い堤の基礎が造られ、家康の時代になって犬山から弥富にいたるお囲い堤が完成しました。そのおかげで尾張側の洪水は大きく減じましたが、美濃側は「水屋」や「輪中」などを作って大水と闘っていました。しかしながら、木曾・長良・揖斐川が網の目のように連なって流れる三川流域においては水害がたびたび起こっていたため、三川分流を目指した努力が長い間続けられました。中でも特筆すべき工事が「宝暦治水」と「明治の改修工事」です。

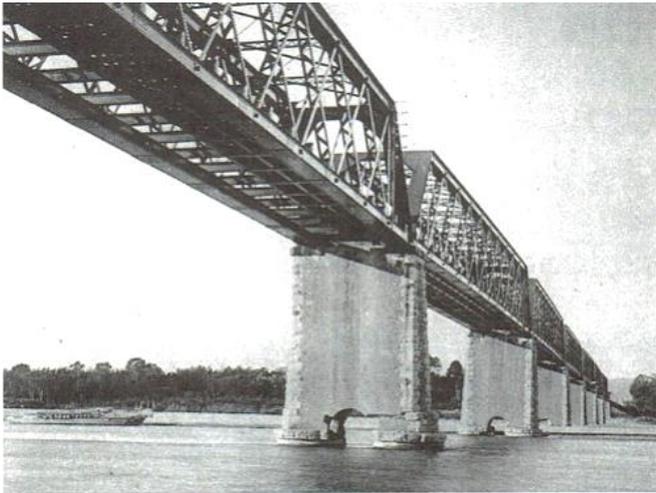
【宝暦治水】

宝暦年間（1754～1755）に江戸幕府が薩摩藩に命じて行わせた治水工事です。薩摩藩は 40 万両（300 億円）という莫大な出費と 80 人以上の犠牲者を出して 1 年 2 ヶ月にわたる工事を終えました。家老の平田鞆負（ゆきえ）は全責任を負って自刃したといわれています。

【明治の改修工事】

明治政府がオランダ人技術者の指導を受けて行った治水工事です。ヨハネス・デ・レーケは山林を保護し土砂の流出を抑制する砂防工事の指導に当たるとともに、三川の完全分流を図った改修計画を作成しました。工事は明治 20 年から 45 年にかけて行われました。

3. 濃尾地震



木曾川鉄橋橋脚破壊
 [「1891年の日本の大地震」岐阜県歴史資料館 蔵]

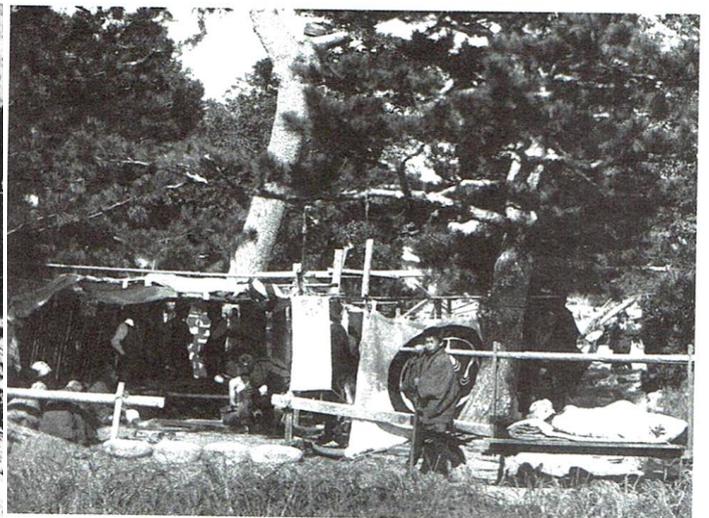
明治24年10月28日6時38分頃、揖斐川上流の根尾谷を震源地とする大地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード8.0、震度は7と推定され、国内で発生した内陸直下型地震では最大のものでした。

地震の被害は岐阜県と愛知県に多く、死者約7,500人、負傷者約20,000人、140,000戸を超える家が全壊しました。木曾川町でも死者143人、負傷者440人、全壊家屋は約1400戸という大きな被害を受けました。

木曾川流域沿いでは液状化現象も発生し、道路・堤防・橋の崩壊、田畑の陥没隆起がいたるところで起きました。加えて岐阜市・大垣市・笠松町・竹ヶ鼻町においては大規模な火災が発生しました。



濃尾大地震（黒田村たき出しの図）



黒田村の帝国大学仮病院
 [「1891年の日本の大地震」岐阜県歴史資料館 蔵]

当時の新聞は「轟くような響きとともに激震が起こり、家屋がバタバタと倒壊し、みるみる地盤を裂き泥砂・水を噴出し、押しつぶされあるいは焼けて死したるものおびただしく・・・」と被害の悲惨さを伝えています。

木曾川町の村別被害状況（愛知県災害誌）

	人口	戸数	死者	負傷者	全壊家屋	全壊率
里小牧	1,252	256	16	96	230	90%
玉ノ井	1,787	373	32	115	302	81%
黒田	5,065	1,012	95	229	908	90%
計	8,104	1,641	143	440	1,440	88%

4. 二重堤防

木曾川からの水害を防ぐため江戸時代の初期にお囲い堤が築かれてきましたが、ところによっては堤防の外側（川側）にも民家や田畑ができていました。木曾川町においては里小牧と玉ノ井の一部がそれにあたり、そこでは小堤防によって水防を図っていました。

昭和13年7月、連日の豪雨により木曾川は大増水をきたしました。町では玉ノ井に臨時の水防本部を設け、全町に救援を要請し、土のうを積み上げるなど必死の防水作業にあたりましたが、13日夕刻に小堤防が決壊して、面積約65ha、210戸の集落が大きな被害を受けました。



昭和十三年の木曾川堤防決壊

昭和13年7月2日から連日降り続いた豪雨は、13日になってとうとう木曾川を決壊させた。被害は葉栗郡だけでも床上浸水150戸、床下浸水60戸に及び、倒壊した家屋も多数あった。写真は消防団、青年団総出で防水作業の警戒にあたる木曾川町民の様子。

この災害復旧を機に、愛知県は延長2,510mの小堤防の改修工事を行いました。着工は昭和14年11月、完成は18年でした。堤内側に在来の本堤（お囲い堤）があることから「玉ノ井の二重堤」と呼ばれています。また戦後においても嵩上げ等の改修工事が進められ、昭和30年には現在にいたる二重堤防が完成しました。



5. 伊勢湾台風

昭和34年9月26日18時過ぎ、紀伊半島の潮岬あたりに台風15号が上陸しました。中心気圧は945mbで、愛知県下ほぼ全域が風速30m以上の暴風となり、ところにより最大瞬間風速が50m以上という驚異的な風速を記録しました。また雨についても1時間に40～60mmの激しい雨が各地に降り、河川は急に水かさを増し、これと高潮によって河口付近ではいたるところで堤防が決壊、大災害となりました。特に愛知県・三重県の被害が甚大であったため「伊勢湾台風」と名付けられました。



犠牲者は死者・行方不明者をあわせ5,098人、負傷者38,921人、全壊家屋36,135棟、半壊家屋113,052棟、流失家屋4,703棟、床上浸水157,858棟に達しました。犠牲者の数は、阪神・淡路大震災が発生するまで、戦後の自然災害で最多のものでした。とりわけ名古屋南部、海部郡南部などは海面下の土地であったため、海岸堤防が決壊するとひとたまりもなく水没しました。加えて名古屋港の貯木場から流出した木材が高潮に乗って住宅地を襲い、被害を大きくしました。



伊勢湾台風による野府川沿いの被害

木曾川町では40人の負傷者のほか、全壊した家が67戸、半壊した家は233戸にのぼりました。また被災地から木曾川町に疎開してきた人は30世帯92人を数えました。

(数値は木曾川町史による)

伊勢湾台風による被害状況

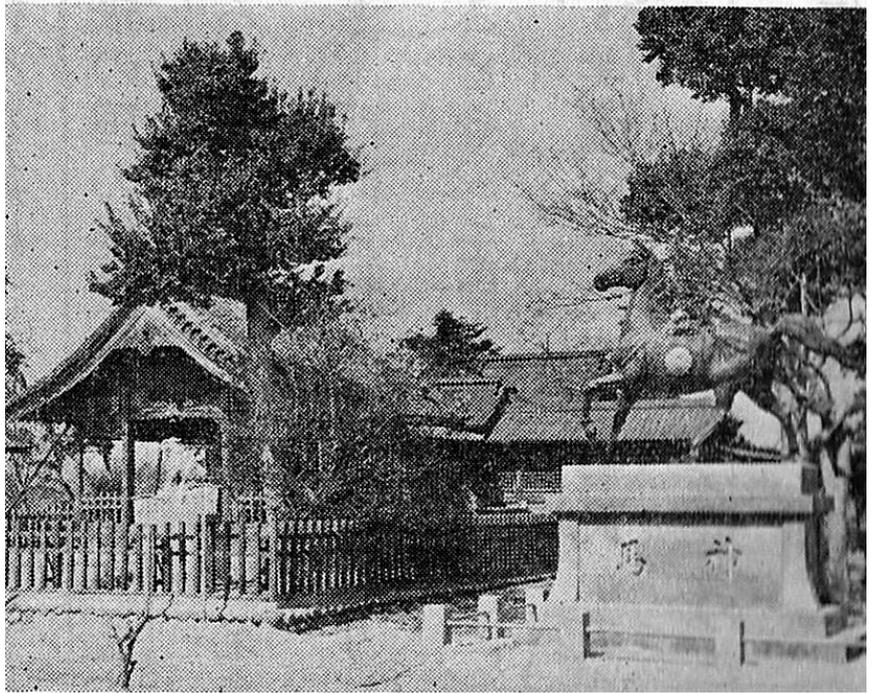
愛知県災害誌

	死者	負傷者	家屋全半壊	家屋浸水	非住家被害	人口 34.9.1
木曾川	—	87	219	23	215	24,042
一宮	14	102	1,469	565	1,493	182,024
尾西	4	105	780	112	274	49,722
稲沢	6	39	321	—	339	49,983
江南	7	174	550	778	1,619	48,788

6. 伊富利部神社

伊富利部神社は八幡社と伊富利部社が合祀されており、八幡社の祭神は誉田別命（ほんだわけのみこと）（応神天皇）で、伊富利部社の祭神は伊富利部氏の祖先、若都保命（わかつほのみこと）です。

当社の創建は延暦年間（782～806）と考えられています。境内に桜門・宝蔵等を擁する周囲4kmもある大きな神社でした。鎌倉時代、源頼朝は一國に三ヶ所のお札所を定めています。尾張国では真清田（一宮）、国分寺（稻沢）と門間の八幡宮が定められ、八幡（やはた）の八幡さまの名前でその名が知られていました。



15世紀中頃、戦乱のために社殿が焼失し、天正10年（1582）黒田城主沢井雄重（かつしげ）が再建したといわれています。当社は門間の庄の総鎮守の宮として崇められました。

なお境内南東部には、高さ4m、周囲約55mの伊富利部古墳があります。当時の豪族、伊富利部氏一族が門間一帯に住んでいたことがうかがわれます。



伊富利部古墳

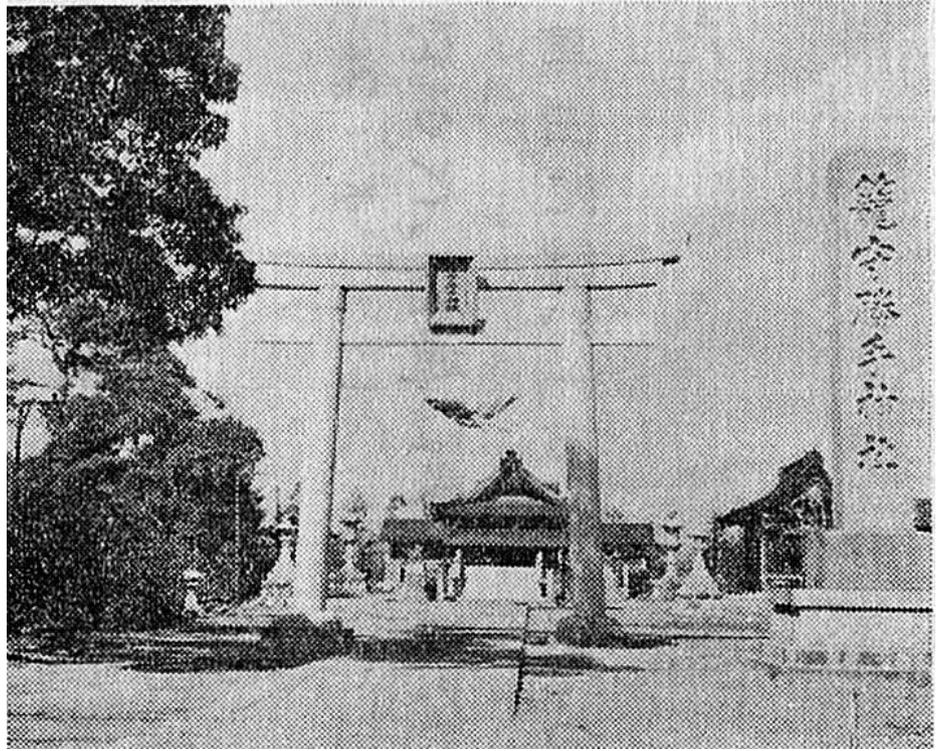
7. 籠守（こもり）勝手神社

創建は不明ですが、延喜式にある黒田神社は当社のことといわれています。祭神は淀比咩命（よどひめのみこと）と瀬織津比咩命（せおりつひめのみこと）です。俗に「おこもりさん」といわれ、北黒田の氏神さまとして親しまれています。

寛永13年（1636）に社殿が焼失したとの記録があります。また伊勢湾台風で境内の多くの木が倒れてしまいました。

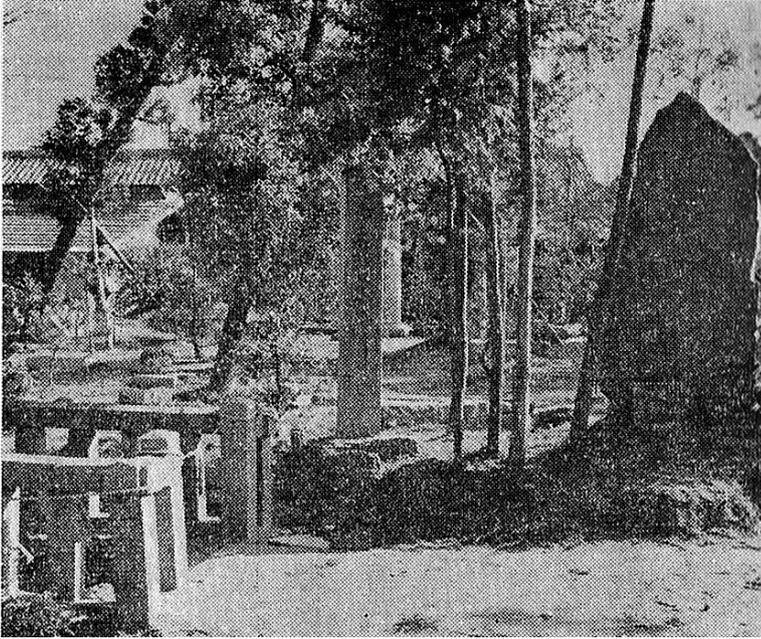
籠守勝手神社という社名は、次のような古事によるものとされています。

むかし、天皇家の相続争いで父君を殺害された二皇子、億計王（おけおう＝仁賢天皇）と弘計王（をけおう＝顕宗天皇）は難を逃れるため一宮真清田に向かう途中、黒田明神社森に籠をとめ籠の中で一夜を明かされました。村人がお芋のご馳走でもてなしますと、お二方は大層お喜びになられ、里人へのお礼にと芋の葉にうるわしい夜露を黒田明神に奉献されたということです。また、願いごとや悩みごとのある人が勝手に参籠し心願すれば必ず成就すると言い伝えられ、黒田明神を籠守勝手神社と尊称するようになりました。



8. 賀茂神社（玉の井の泉あと）

玉ノ井という地名の起源になった「玉の井清水」には、奈良時代に光明皇后がこの水を用いて病を治したという伝説があります。かつての鎌倉街道の道筋には、醒ヶ井・垂井・玉ノ井等の泉がありますが、玉の井は平野の真中に湧出した泉で、多くの旅人も休んだでしょうし、伝説や和歌も残されています。



鎌倉時代初期の歌人で従三位参議飛鳥井雅経が詠んだとされる和歌です。

思ひいつや

みたらし川に せしみそぎ

忘れぬ袖の 玉の井の水

玉の井清水がある賀茂神社の創建は六世紀半ばとされ、延喜式にある穴太部（あなほべ）神社は当社であるとされています。祭神は玉依姫（たまよりひめ）と寛治4年（1090）に合祀された賀茂別雷命（かもわけいかずちのみこと）で、その年に賀茂神社と改称されました。源頼朝の寄進といわれる鎧冑のほか多くの宝物があります。

【延喜式】

平安時代中期につくられた律令です。その中に記載された神社を式内社といい、それだけ歴史がある神社ということができません。

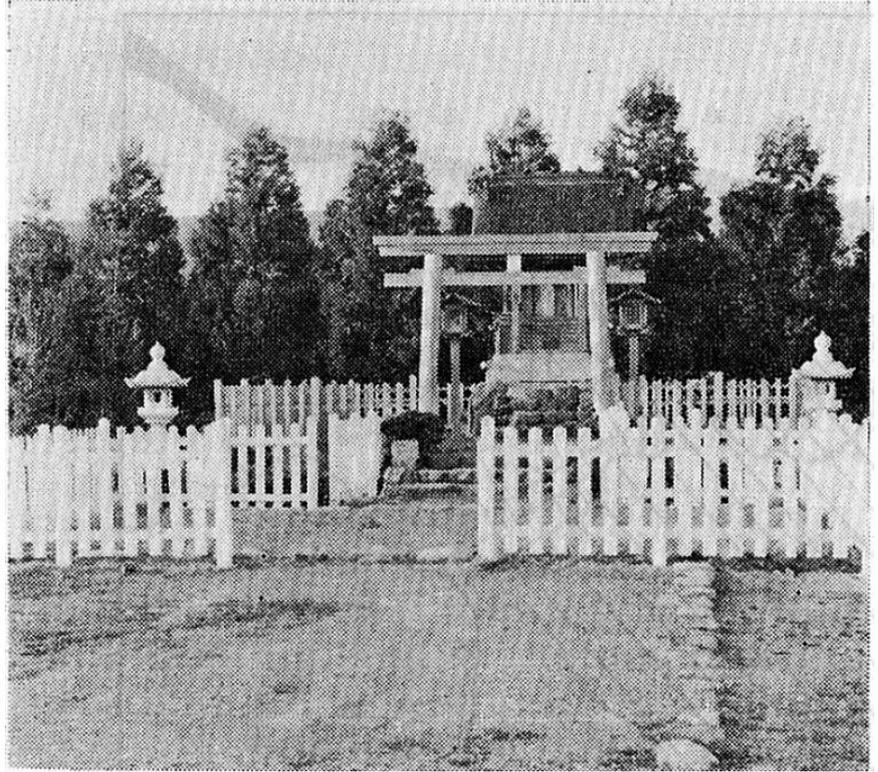


9. 護国神社

祭神は日清戦争以降の戦争で亡くなった 435 柱の御霊です。

当初は太平洋戦争における英霊の顕彰事業として忠魂碑の建立が計画されましたが、一転、神社を建立し、戦没したすべての英霊をお祀りするはこびとなりました。

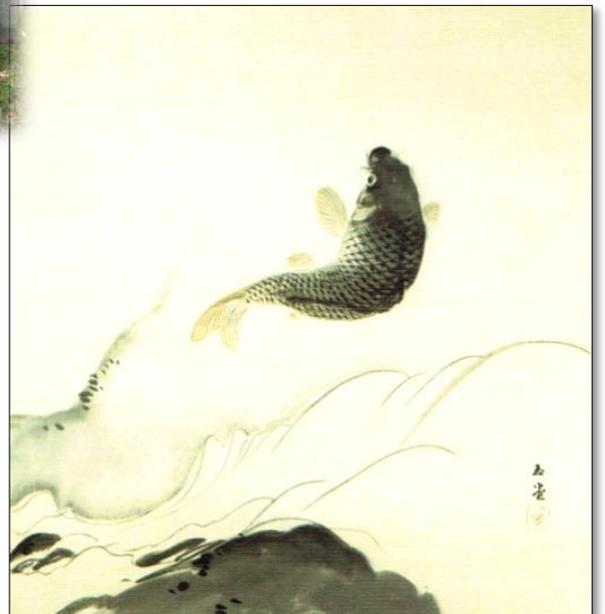
お社は昭和 33 年 4 月 29 日に完成し、竣工式及び大祭が盛大に執り行われました。



なお、この事業に賛同された川合玉堂翁は、自筆の作品を献上することを約されましたが、他界されたため、ご子息より「跳鯉」の絵が送り届けられました。この絵は神社の宝物であるとともに、市の文化財に指定されています。

(昭和 42 年木曾川町に寄贈)

跳鯉



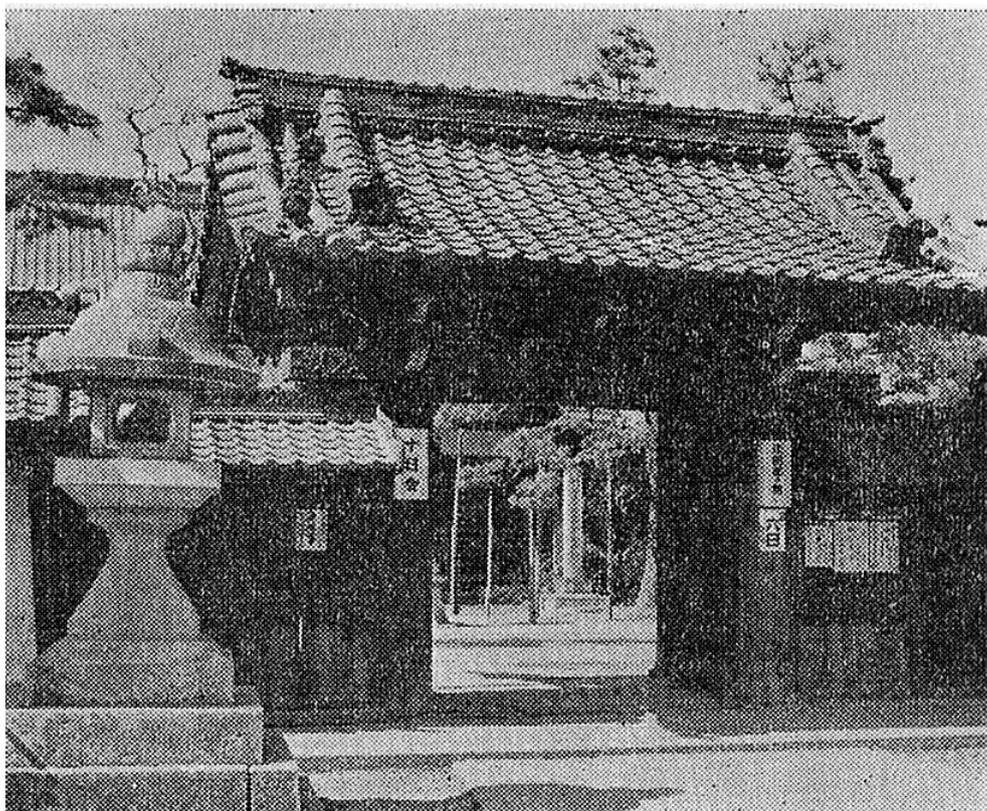
10. 河野善龍寺

弘仁3年(812)天台宗の開祖である最澄(伝教大師)が道場「専修坊」を建てたのが始まりとされます。住職は若栗(わぐり)神社の社司も兼ねていました。

鎌倉時代には、若栗祐道(ゆうどう)が親鸞聖人の教えに共鳴して浄土真宗に改め、濃尾平野一帯にその教えをひろめました。

寺伝によれば、当寺が現在の場所に移ったのは天正4年(1576)とされ、慶長8年(1603)に河野善龍寺と改称しています。

なお明治天皇が明治11年に東海北陸を巡幸されたおりには当寺が休憩所になりました。その記念碑が境内に建っています。



11. 法蓮寺（妙見さま）

日蓮宗の寺院で明応元年（1492）に日妙上人により創建されました。後に黒田城主山内盛豊の庇護を受けて発展しました。

本堂裏の墓地には盛豊と長男十郎が並んで建つ墓碑があります。なお土佐藩祖となった二男一豊の「出生之地」碑もあります。

また山門を入った右手には妙見堂が建ち「妙見菩薩」が祀られています。この妙見菩薩は通称「黒田妙見」といわれ、正保年間（1644～1648）日相上人のときに安置されました。大阪の能勢（のせ）妙見、愛知の内津（うつつ）妙見とともに日本三大妙見に数えられるほどの立派な仏さまといわれています。



なお、明治6年（1873）、当寺に黒田小学校の前身である「玄圃学校」が開設されました。

右：山内盛豊の墓
左：山内十郎の墓



12. 宝光寺（お地蔵さま）

永禄4年（1561）黒田城主織田勘解由（かげゆ）広良が、白山神社南西にあったものを現在地に移し、美濃の国大宝寺より鏡清和尚をお迎えして開山しました。臨済宗妙心寺派に属します。

当寺の境内にお祀りしてあるお地蔵さまには次のような言い伝えがあります。

むかし、お百姓夫婦が不治の病にかかったわが子の快癒を神仏に祈っていたところ、ある夜「汝の田の中に地蔵菩薩の尊像あり、その地蔵尊を祀れば汝の願いを成就せん」とのお告げがありました。夫婦が早速に掘り出した地蔵尊を仏壇の前に安置しお敬いしますと、まもなくわが子の病は全快しました。このことが近郷に知れわたり人々が参詣に集まるようになりました。

承応3年（1654）にはお堂が建立されるとともに、「田中の子育て地蔵」と称され、子供の守護仏として崇められるようになりました。



13. 黒田城あと

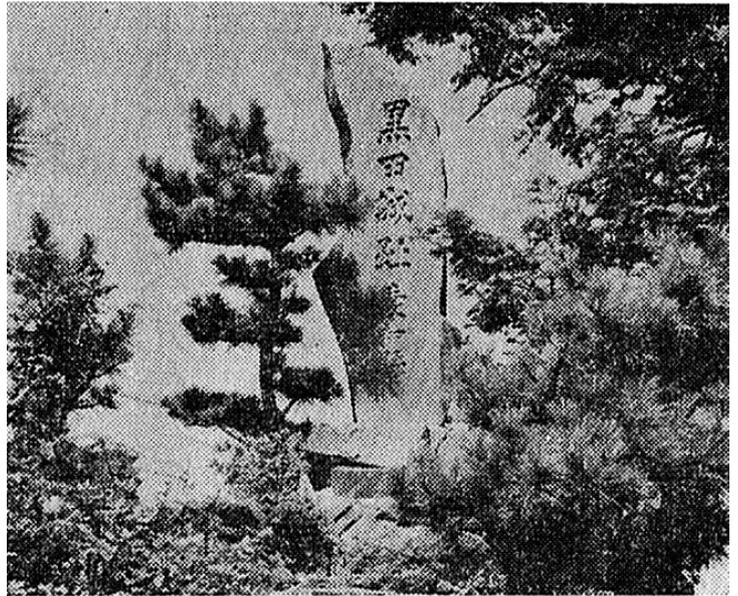
黒田城は明応年間（1490年代）に五藤光正（五藤氏の祖先）が館を築いたのが始まりと考えられています。その後、岩倉城を本拠とする織田信安が天文年間（1550年頃）に家老の山内盛豊（一豊の父）を城代としました。弘治3年（1557）盛豊は夜討ちにあい長男十郎とともに討たれ、織田広良が城主となりました。

永禄5年（1562）広良が美濃軽海で討ち死にしたあと、犬山織田氏の家老和田新助が城主となります。天正2年（1574）新助が長島の一向一揆の戦いで討ち死にし、弟の和田定教が城主となりました。

天正10年（1582）織田信長が明智光秀に討たれた後、伊勢尾張を領することとなった二男信雄（のぶかつ）は澤井雄重（かつしげ）を城主としました。天正18年（1590）豊臣秀吉は一柳（ひとつやなぎ）直盛を黒田城主三万石としました。秀吉の死後、直盛は関ヶ原の戦功により伊勢神戸五万石に転封されます。ついで家康の四男松平忠吉が尾張に封ぜられ、家臣富永忠兼が黒田城に入りましたが、しばらく後に廃城となりました。城の規模は、最終的には堀を含めると東西約290m、南北約250mの本丸・二の丸・三の丸を備えた城であることが分かっています。

後に土佐20万石の大名に出世した山内一豊は、天文14年（1545）に盛豊の二男としてこの地に誕生しました。弘治3年7月、黒田城が夜討ちにあい父盛豊と兄十郎が討ち死にした際、13才の一豊と母弟妹は隠し窓を突き破って竹藪に逃げ、生竹を倒して橋とし、堀をわたって岩倉城にたどりついたとの記録があります。

黒田城あとは現在黒田小学校となり、その東北角に小公園が整備され、一豊立志像ほかの記念碑があります。

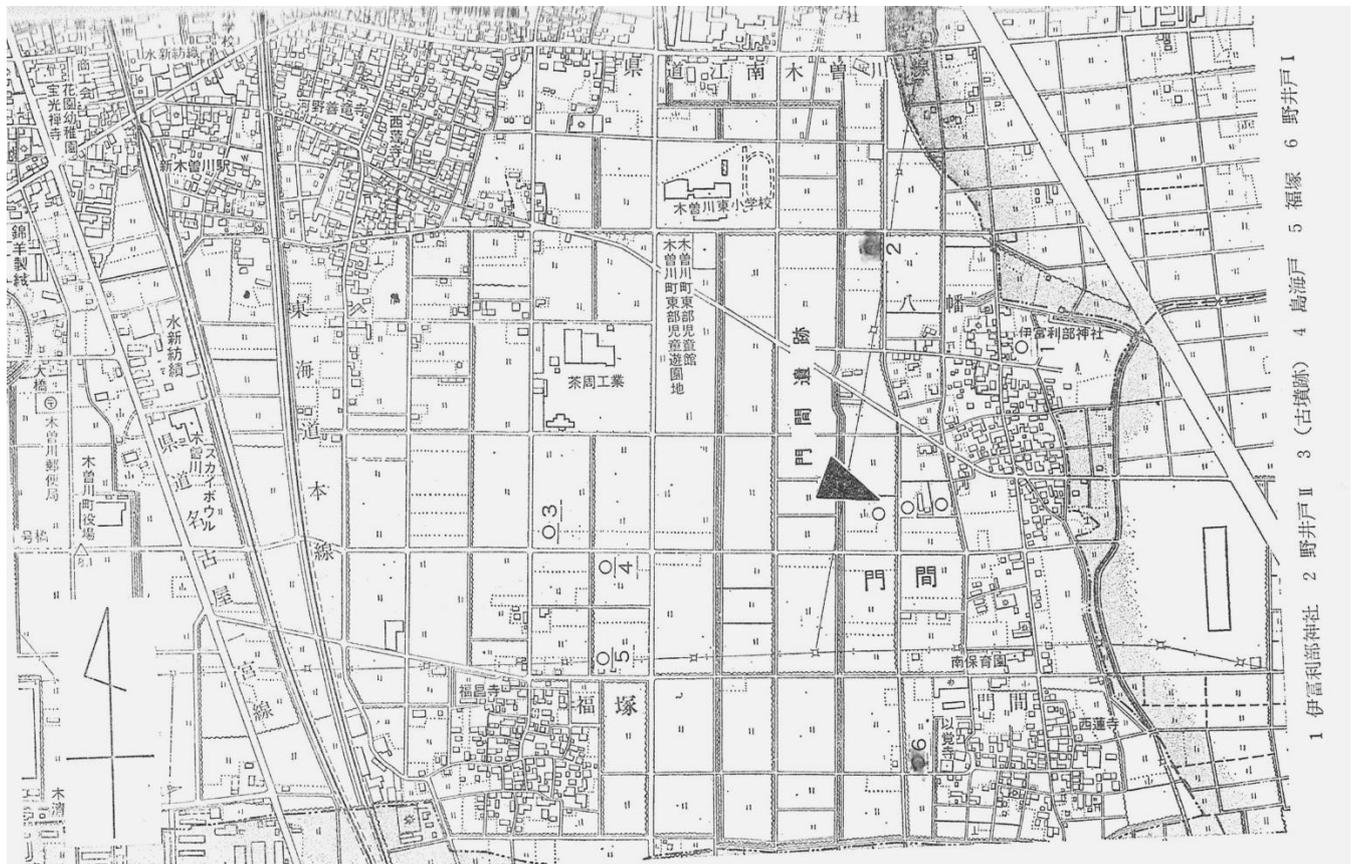


14. 門間の野井戸

昭和45年5月、門間の以覚寺西隣の水田の中から古井戸が発見されました。この井戸の底から出土した土器の破片や日用品などから、鎌倉・室町時代中期にかけての野井戸であると鑑定されました。

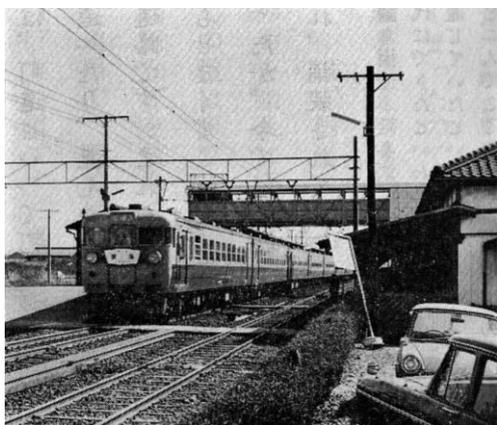
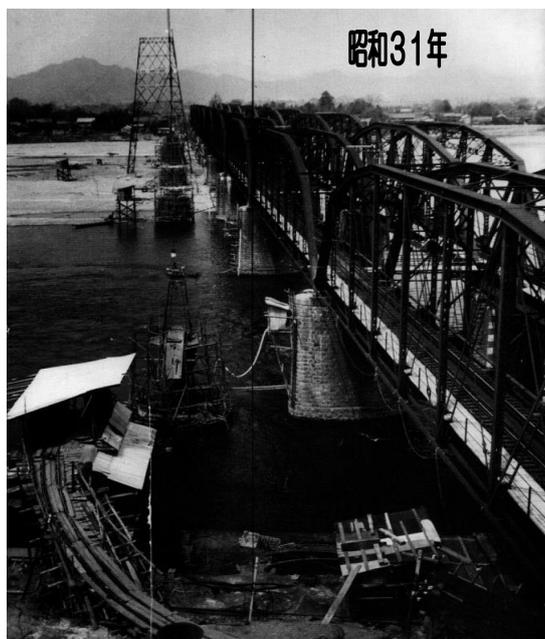
野井戸とは少数の農家が飲料用としてつくった共同の井戸のことです。

中世の野井戸が原形のまま発見されたのは全国的にも珍しく、研究のためいつでも掘り返すことができるように砂で埋め直して保存してありましたが、残念ながら現在では田圃となっており、跡かたもありません。



15. 木曽川駅（JR）

日本で最初に鉄道が開通したのは明治5年の新橋～横浜間です。この地域では明治19年に熱田～木曽川間が開通、翌20年には木曽川の鉄橋が完成し、ここに大垣～名古屋間が開通しました。ちなみに東海道本線が全通したのは明治22年です。それから間もない明治24年に濃尾地震が起こりました。駅舎は全壊、線路は曲がり、木曽川橋梁は陥没という大きな被害を受けました。これらの鉄道施設の完全復旧には6か月を要したといえます。その後、大正2年までに全線が複線化されました。なお国鉄は昭和62年に7社に分割民営化され、当地区はJR東海が継承しました。現在の橋上駅ができたのは平成20年のことです。



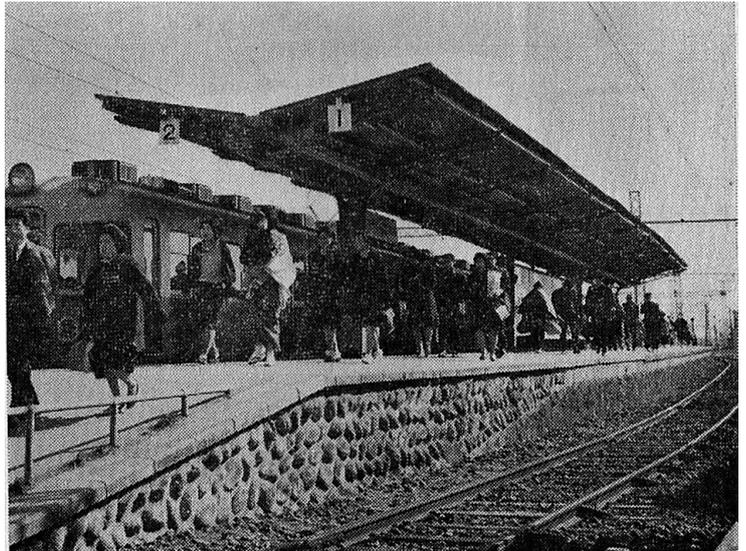
ところで、木曽川駅を語るに欠かせないのが「見染塚」です。俳人正岡子規は明治24年の夏、木曽を經由し美濃伏見から木曽川下りの舟の客となり、北方で下船後、当時の木曽川停車場前の茶店で休憩しましたが、その茶店の娘をどうしても忘れられなかったという逸話を残しています。木曽川町ではこれを記念して、平成6年、駅に隣接した黒田公園に記念碑を建立しました。



16. 新木曾川駅（名鉄）

木曾川町にある名鉄駅には、名鉄本線の新木曾川駅と黒田駅、尾西線の終着駅の玉ノ井駅があります。新木曾川駅ができたのは、木曾川架橋工事が完成し名古屋と新岐阜を結ぶ路線が開通したときと同じ昭和 10 年のことです。当初の駅舎は昭和 40 年に焼失したため、翌 41 年に鉄筋 4 階建ての新駅舎に生まれ変わりました。また昭和 55 年には陸橋が完成し、線路を渡って改札へ向かう不便を解消しました。

新木曾川駅には特急や急行も停まりますし、普通列車への乗り換えもでき、木曾川町の表玄関として大きな役割を果たしています。なお、尾西線につきましては、大正 3 年に一宮と木曾川橋（宝江）間に線路が敷かれ、同 7 年には木曾川港という貨物駅ができ、舟運との連絡線としても利用されました。その後、戦争のため、昭和 19 年に奥町から北は営業休止になりましたが、戦後、地元の人々の強い要望によって昭和 26 年に玉ノ井駅まで延長され、現在に至っています。



名鉄新木曾川駅前の通勤・通学風景（木曾川・昭和39年）乗降客が多かった新木曾川駅の朝の風景。右に見える木造駅舎は、この翌年の昭和40年に火災で焼失し、鉄筋4階建ての新駅舎に生まれ変わった。



17. 旧国道 22 号

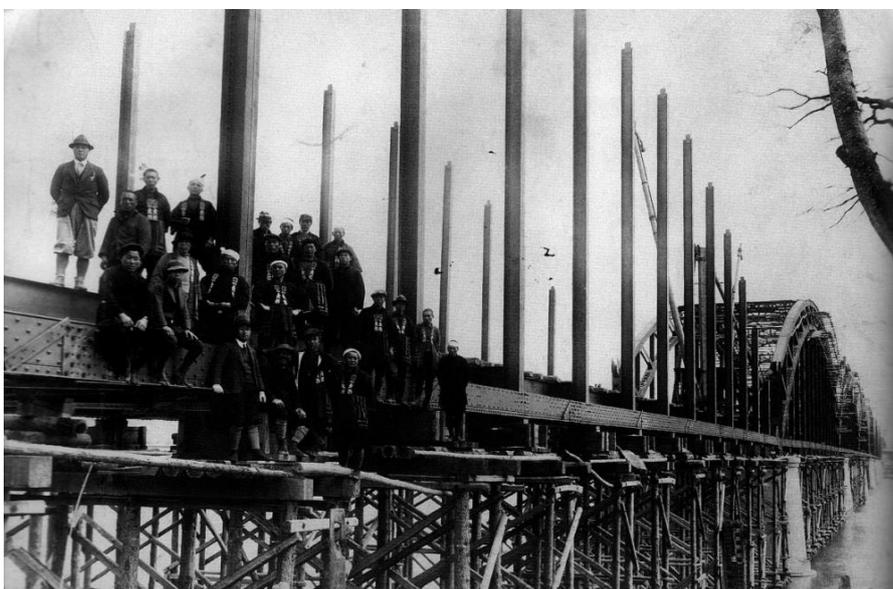
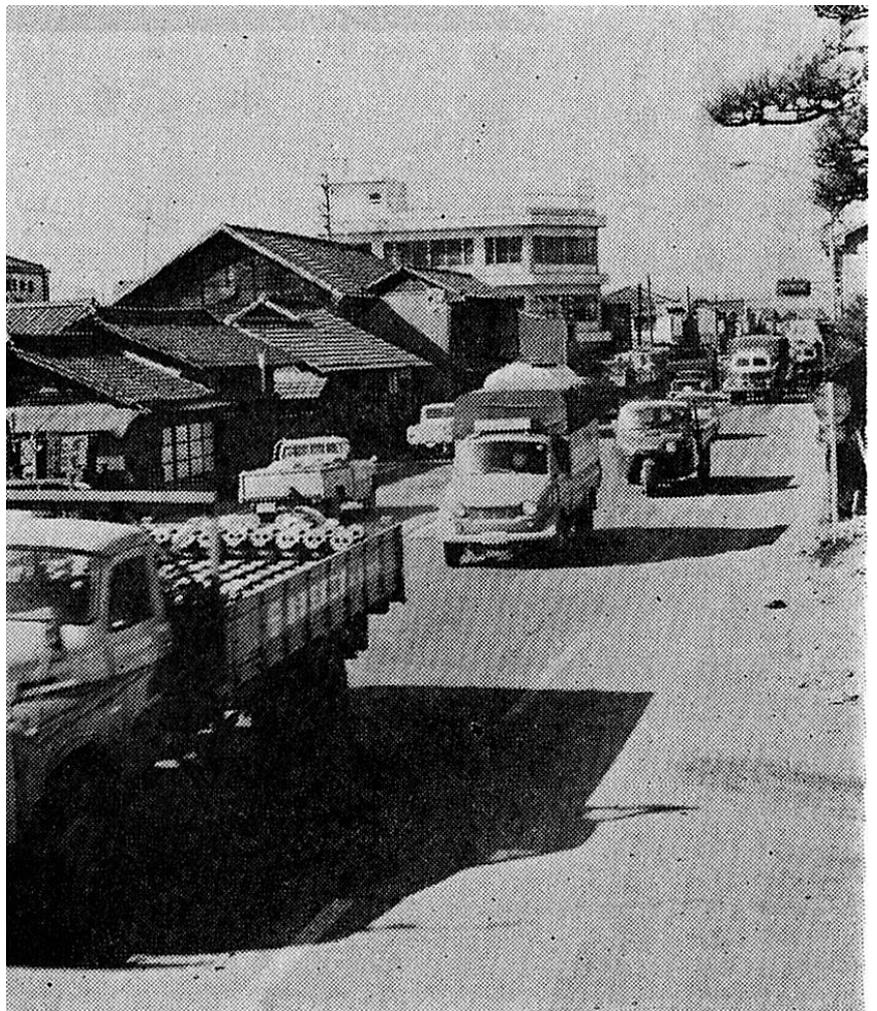
名古屋と岐阜を結ぶ国道 22 号（名岐国道）は、名岐バイパスができるまでは今の県道名古屋一宮線のことでした。この旧国道 22 号のもととなったのが岐阜街道です。

元和 5 年（1619）に岐阜が尾張藩領に加えられますと、藩の政治上重要な道路として岐阜街道が造られました。岐阜街道は清須を過ぎた地点で美濃路と分岐し、下津、一宮を経て、黒田、里小牧へと通じ、里小牧から木曾川を船で渡り、笠松、加納に至っていました。尾張藩主が岐阜へ行き来するときはこの街道を通ったとされています。以来、岐阜と名古屋を結ぶ経済・文化の重要な道路として長く利用されてきました。

明治 43 年、両岸住民の悲願であった木曾川橋が架橋されました。長さ 458m、巾 5.5m の木橋でしたが、度重なる洪水で橋杭が流されましたので、橋脚部をコンクリート工法として改築されました（今残っている橋脚部分がこれです）。

その後、昭和 12 年には、100m ほど下流にトラス式の鋼鉄製の新橋（長さ 462m 巾 11.3m）が完成して現在に至っています。

国道 22 号となったのは昭和 27 年のことでした。



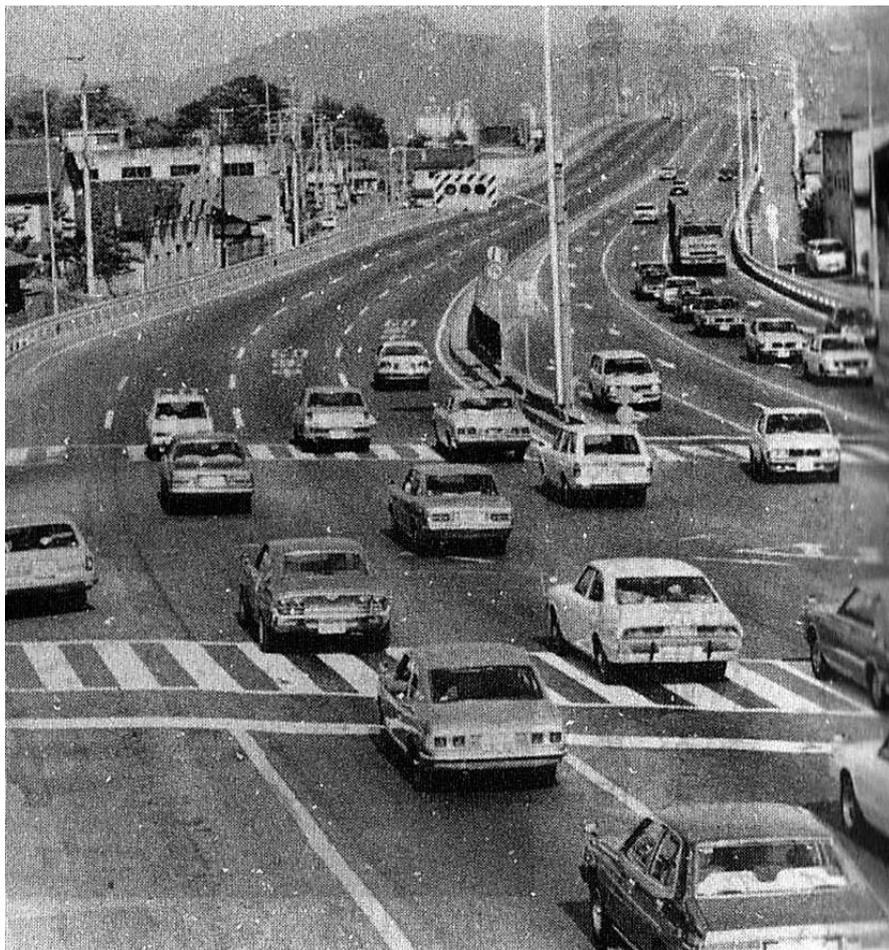
⇨ 建設中の木曾川橋（昭和 10 年頃）

北方と笠松間の木曾川に、明治 11 年明治天皇の行幸に際し、宝江に宝橋という舟橋が建設された。その後、同 43 年木橋の木曾川橋が建設された。さらに昭和 12 年、約 100m 下流に 7 つのアーチを持つ鉄製大橋（全長 462m）が建設された。

18. 国道22号

昭和30年代後半以降、モータリゼーションが急速に伸展し、これに対処するため、全国各地で道路網の整備・拡充が進められました。名古屋と岐阜を結ぶ国道22号（名岐国道）におきましても、車の通行量が飛躍的に増えてきたため、新しいバイパスを造る必要が出てきました。

そこで、昭和33年から片道3車線道路の事業化が進められ、昭和44年に全線開通しました。名古屋市熱田区の国道1号と岐南町の国道21号とを結ぶ総延長37kmの広域幹線道路です。一宮木曾川インターチェンジから東海北陸道、名神・東名高速道路を経て、北陸地方や東京、大阪などと結ばれています。ちなみにバイパスにある新木曾川橋は長さ589m、巾30mです。



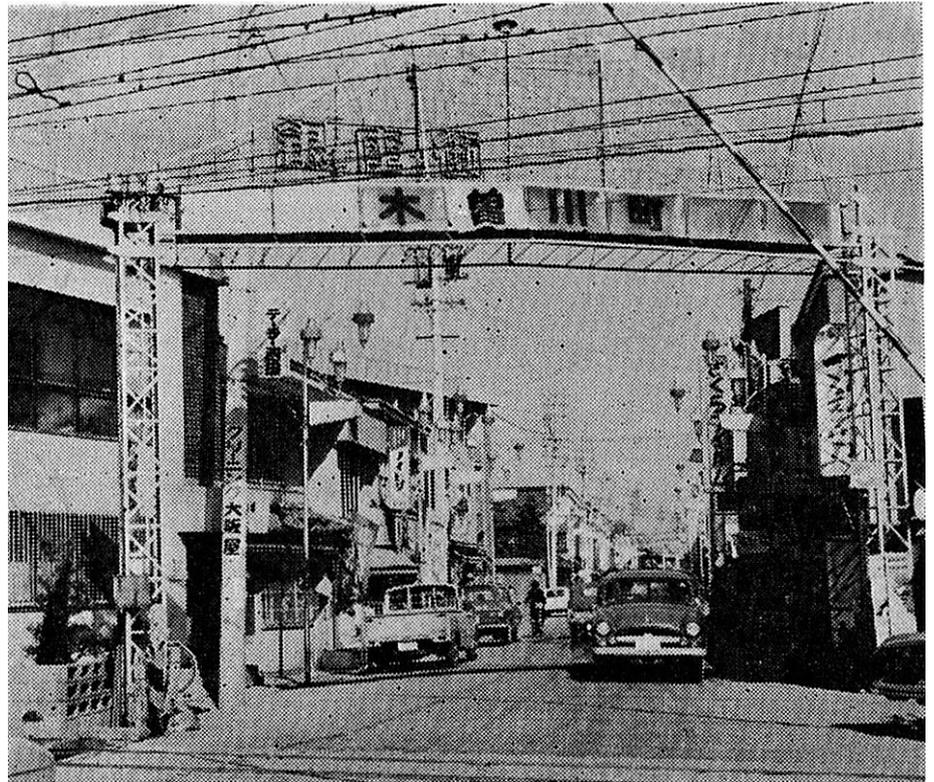
19. 銀座通り

木曽川町のほぼ真ん中から県道江南木曽川線が東に抜けていますが、このうち特に名鉄新木曽川駅を中心に東西に続く通りを銀座通りと呼んでいます。この通りには、多くの飲食店や買回り品店、銀行や医院等が集まっています。

また、県道名古屋一宮線が名鉄線の西側を沿うようにして銀座通りを南北に横切っています。この付近には、役場、郵便局、NTT局、消防署等、官公庁も集まっており、木曽川町で一番人や車の往来が多い地域となっています。

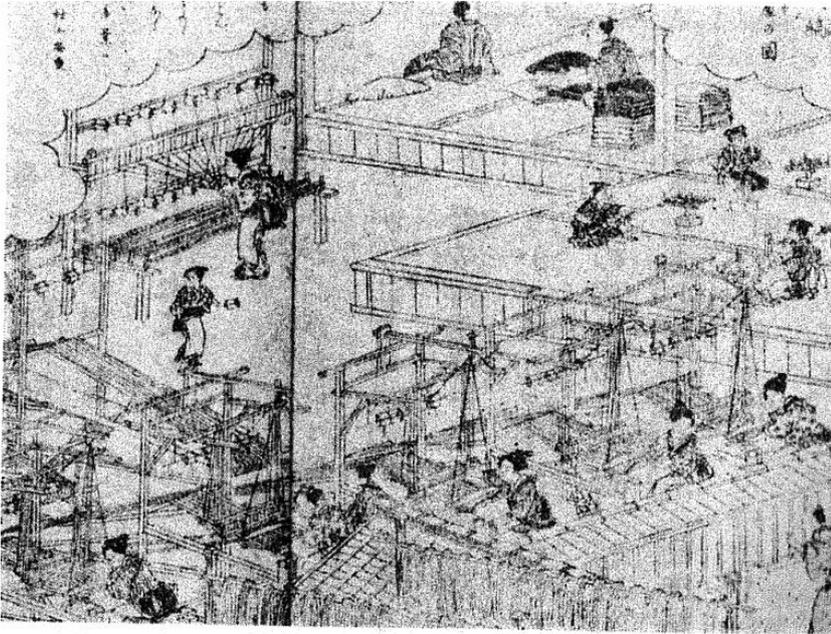
近年では大型店舗も複数進出してきていて一層のにぎわいを見せています。

なお、戦国武将で土佐藩主となった山内一豊の生誕を記念し、毎年9月、このエリア一帯で一豊まつりが開催されています。この祭りは昭和59年から始まり、甲冑姿の一豊とその妻・千代の銀座街パレードや、一豊を顕彰するステージイベントが展開されます。



20. 繊維産業のあゆみ

この地方の織物の歴史は古く、奈良時代には尾張・美濃地方の貢物として絹があったとされています。また鎌倉時代には桑園の広がりが和歌に詠まれています。桑は荒地でも育ちやすく、砂礫が多い犬山扇状地や水はけの良い自然堤防洲を桑園に利用したのだと思われます。また、たび重なる川の氾濫もあって、農家の副業として行われてきた絹織物の生産に生活の比重を移しかえる農民が増えてきました。



江戸末期の織物工場（尾張名所図絵）

この絹が綿にとって替わるのは江戸時代になってからのことです。戦国時代には丈夫で実用的な綿織物が普及し始めていましたし、江戸時代には、農民は木綿以外の衣料を着ることを禁ずる旨のお触れ書も出ています。絹と綿との栽培条件は似ていますし、織物の技術もあるわけですので、絹から綿への転換はそんなに難しいことではなく、尾張は綿作地帯の中心として、また綿織業地帯として、次第に全国的に有名になっていきました。

ところで、織機のことを機（はた）と言います。機屋（はたや）は、初め自分の家で織る内機（うちばた）が主でした。しかし、資本のある有力者は原料の糸を買い、機にかければすぐ織れるようにして、付近の農家に配り、工賃を支払って織らせる出機（でばた）をするようになりました。中には、内機と出機の二つを営し、内機も数台から十数台もあって、従業員を10~20名も雇う工場制手工業も現れました。

明治22年、東海道本線が全通してからは、繊維製品が関東・関西の市場をにぎわせるようになり、原料の入手も容易になりました。明治24年の濃尾地震を契機に、古くなった織機を一新して新機種を導入、綿織物中心から絹綿交織物へと転換していきます。

明治末期から大正時代にかけては、絹綿交織物から毛織物生産に転換を遂げる時期であるとともに、電力の普及もあって、機械も手機（てばた）から動力織機へ、木製から金属製の機械へと革新し、太平洋戦争までは、毛織物産業は軍需とも結びついて大いに発展しました。

しかしながら戦争が始まると、原料の不足、男手の不足、設備の破棄、織機の供出、さらには空襲等により、繊維産業は壊滅的な打撃を受けます。それでも戦争が終わると、事業の再開に向けて人々の懸命な努力が続けられました。



その結果、深刻な衣料不足に加えて朝鮮戦争の特需もあって、終戦直後の不況を乗り越え、俗にいう「ガチャマン」時代を迎えることとなります。高度経済成長期に入った頃には、製品の品質も向上して輸出も大きく増えました。

ところが昭和40年代以後、対米繊維輸出規制問題やオイルショックが重なり、業界は不況に落ち込むこととなりました。また、アジア諸国の生産技術の向上や、円高や人件費の上昇等もあって当該諸国からの輸入が増大し、国内の繊維産業は大きな打撃をこうむりました。加えて合成繊維の生産が盛んになり、市場のニーズは毛織物など天然繊維から合成繊維に変わってきました。さらには、バブル経済が崩壊して長期にわたる景気後退期が続きました。

このように、近年、繊維産業が直面する状況は、構造的な不況業種と位置付けられるほど非常に厳しいものになっています。

そのため、大手であっても廃業したり工場を閉鎖する企業が相次ぎましたし、小規模工場においては後継者不足や従業員の高齢化、雇用数の減少などの問題を抱えて、その数は年々減少してきています。

そこで、繊維関連工場の多くは、高品質の毛織物とともに、合成繊維による衣料用や室内装飾用などの織物生産を指向したり、羊毛と化学繊維を混ぜ合わせた織物を開発するなどの努力をしてきました。

また、中国や韓国などの東アジア諸国に拠点を置き、現地工場で生産することにより人件費等コストの削減を図っている企業もあります。『つくれば売れた時代』から、消費者の需要に合わせて多様な種類の商品を必要最小限だけ生産するという『多品種少量生産』という形態に変わってきたのです。

すなわち、消費者のニーズや好みを優先した製品の生産を実現するとともに、高級な繊維製品を生産したり、注文を受けたらすぐに生産・出荷できるように設備を整える等、「差別化」を目指した努力が続けられているのです。

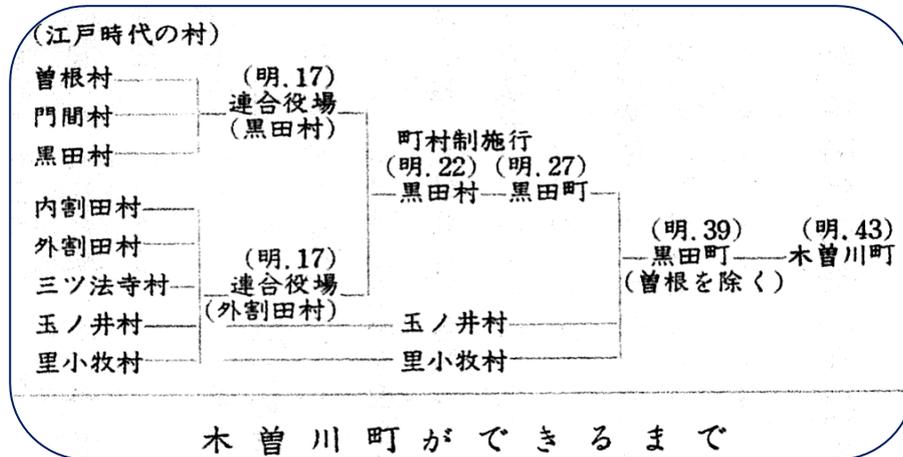


参考 かつての大きい工場の現在 (s41年従業員200人以上の工場：木曾川町史)

工場名	現在
倉敷紡績株式会社(木曾川工場)	イオンモール木曾川
木曾川修整株式会社	エーフラッグ木曾川店(パチンコ)ほか
クラウン整絨株式会社	分譲住宅ほか
水新毛織株式会社	ミズボウ(進学塾・スイミングスクール)
東海染工株式会社(木曾川工場)	アピタ木曾川店
艶金製絨株式会社	マックスバリュ、ケーヨーD2

21. 町役場

明治17年、黒田村と外割田村にそれぞれ連合役場ができ、玉ノ井村、里小牧村とともに、木曽川町内には四つの村組織が存在していました。それが黒田町としてひとつの町に統一されるのは明治39年のことです。しかし、地域内には町名に黒田という特定の村名を冠することを不服とする者もいて、町会は国鉄木曽川駅の名称をとって町内の結束を固めることを決議し、明治43年に町名を木曽川町に改めました。



役場は、古城→ 宝光寺東→ 現庁舎
(昭和51年)と移転してきました。

【略年譜】

- 明治22年 黒田・門間・内割田・外割田・三ツ法寺・曾根村が合併して黒田村となる
- 明治27年 黒田村を黒田町と改める
- 明治39年 玉ノ井・里小牧村が黒田町に合併
- 明治43年 黒田町を木曽川町に改称する
- 大正13年 役場を黒田字古城(現黒田小学校校庭)から宝光寺東に移設
- 昭和51年 現町庁舎が完成、移転
- 平成17年 一宮市・尾西市・木曽川町合併



2.2. 学校教育（木中・黒田小・木西小・木東小）

室町時代頃からお寺を中心にして寺子屋が始められました。おもにお坊さんの跡継ぎを教育する目的でしたが、後にはそれ以外の子供も教育するようになりました。江戸時代になると一般の子供のために「読み、書き、そろばん」をお寺以外のところでも教えました。生徒を「寺子」と呼び、先生のことを「師匠」といいました。入学することを「寺入り」と呼び、男女とも六才から八才ぐらいまでで、三年間ほど勉強するのが普通でした。

明治5年に学校の制度が定められ義務教育の基が築られました。黒田小学校、木曽川西小学校は明治時代に開設と歴史は大変古いものです。一方、木曽川中学校は太平洋戦争後、六・三制が行われて昭和22年に開校、木曽川東小学校は昭和51年に黒田小学校から分かれて開設されました。

	昭和40年	昭和45年	昭和51年	平成30年
木曽川中学校	1,091人	968人	1,205人	980人
黒田小学校	1,240人	1,378人	1,048人	543人
木曽川西小学校	894人	1,060人	1,277人	789人
木曽川東小学校	—	—	663人	657人

木曽川中学校



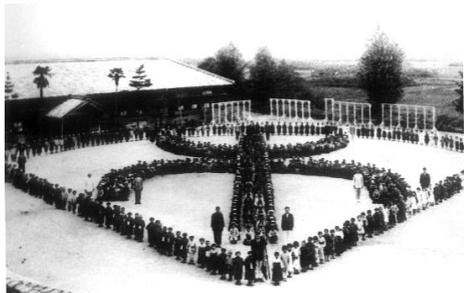
S22 尾州織物工業協同組合の建物を仮校舎として開校
翌S23年に里小牧の現在地に移転した

黒田小学校



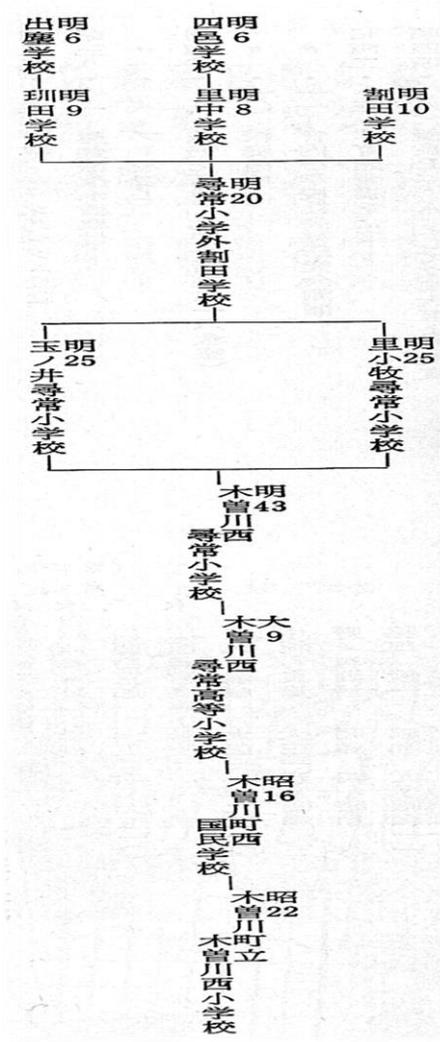
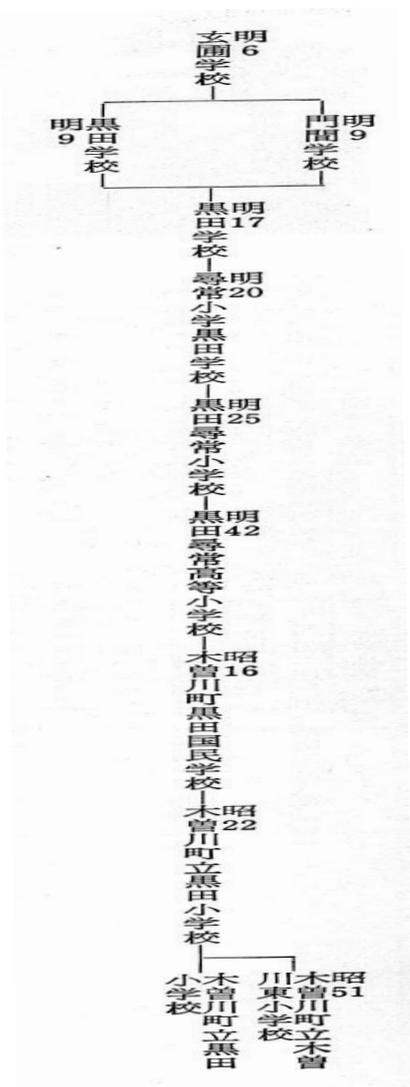
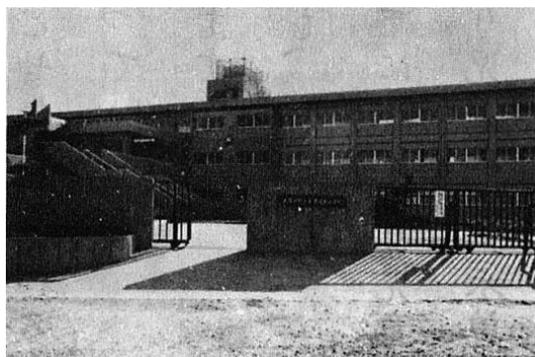
上段左：黒田小学校の旧講堂 S32～S46にかけて現在の校舎が新築されたが、その時取り壊された旧講堂の外観

木曾川西小学校



左：S2 の木曾川西尋常高等小学校

木曾川東小学校



23. 消防組織

私たちの命や財産を火事から守ってくれるのが消防署です。消防署には消防隊と救急隊が置かれ、火災の予防、火災の消火や人命救助、救急業務などの消防活動を第一線で行っています。近年では、交通事故や病人・けが人への対処等で救急活動のウェイトが高まっています。また消防署とともに防災活動を行っているのが消防団です。消防団員は平時はそれぞれの仕事についていますが、火災が発生した時にはいち早く出動して消火にあたります。なお、消防署・消防団ともに堤防を見回ったり、水防演習などをして大水に備える活動にも携わっています。



昭和40年 木曾川消防団操法訓練
木曾川中学校で行われた町民体育祭で、日ごろの訓練成果を町民に披露。

【消防組織の歩み】

- 明治 29 年 黒田消防組結成 62 名
- 明治 43 年 町名変更に伴い木曾川町消防組と改称
- 昭和 23 年 消防組織法が制定され警察機関から分離
- 昭和 30 年 団員 130 人、消防車 3 台
- 昭和 43 年 木曾川町消防本部・消防署を設置、発足
- 昭和 46 年 消防署：消防車 1 台、タンク車 1 台、
救急車 2 台、消防吏員 20 名
消防団：消防車 2 台、団員 130 名
- 昭和 53 年 消防本部・消防庁舎を現在地に移転
- 平成 17 年 木曾川消防本部を木曾川消防署に改称
- 平成 30 年 消防署：消防車 2 台、救助工作車 1 台、高所作業車 1 台、救急車 2 台、広報車 2 台、
消防吏員 39 名
消防団：消防車 3 台、
団員 71 名



24.木曽川病院

木曽川病院は昭和 25 年に国民健康保険直営木曽川町診療所として開設されました。当初の診療科は内科、外科、小児科の 3 科でした。

昭和 27 年に町立木曽川病院に改称し、産婦人科、眼科を加えた 5 科（45 床）になりました。また、この年には付属西診療所が開設されました（西診療所は昭和 46 年に閉鎖）。

このように病院の整備を図りながら地域医療の充実に

努めてきましたが、施設も老朽化したため、平成元年に病院本館を建て直しました。診療科は内科、外科、整形外科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科の 5 科（120 床）となりました。



また平成 12 年には病棟の新築と本館の増改築等を行い、現在では、内科、リハビリテーション科、眼科、外科、整形外科、循環器内科の 6 科（138 床）となっています。

なお、平成 17 年の合併により、一宮市立木曽川市民病院に改称されています。



25. 「雀のお宿」 創設 100 年

「雀のお宿」の創設者である野田素峰（順之助）（1892～1947）は、明治 25 年に現在の一宮市大和町花池で生まれました。生来病弱で早稲田大学を中退、愛妻とともに故郷へ帰り本町で書店を開きましたが、まもなく愛妻が病死してしまいます。

失意に沈む素峰は生きる指針を得ようと妙興報恩禅寺で禅の修行に励んで信仰を深め、越後の僧『良寛』を敬慕しつつ、自分と同じ境遇の虚弱児の救済を発願して、大正 10 年、北方町宝江に療養施設を造りました。

しかしながら、当時は児童の愛護事業に対する社会の理解は乏しく、政治結社ではないかとの非難中傷もあるなか、昭和 2 年に木曾川町里小牧の木曾川河畔に移転しました。

施設運営の道は険しく、何度もの挫折がありました。早稲田大学時代に知り合った北原白秋、野口雨情らの支援を受けながら、少しずつ社会の理解を得られるようになりました。ちなみに「雀のお宿」の名付け親は北原白秋とされています。

昭和 11 年秋、木曾川堤の改修工事に伴い「雀のお宿」は恵那峡（恵那市大井町）へ移転しました。時代は戦時色が深まり、園児の食糧の確保さえ困難になる世相の中、素峰は北原白秋や名取春仙らの文化人、磯貝謙造らの心ある教育者、長松英一らの医学者に支えられながら、学園運営に奔走しました。

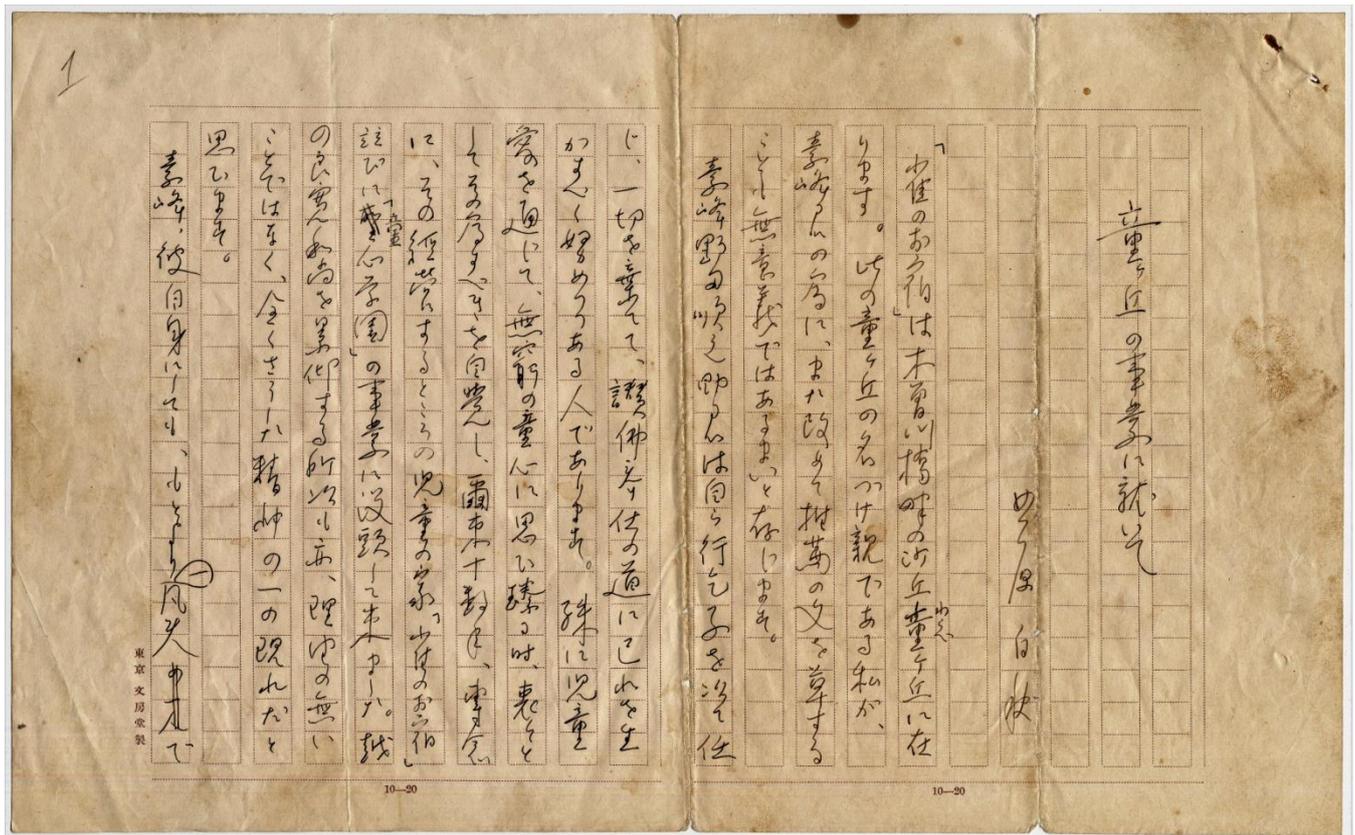
「雀のお宿」は第二次世界大戦の余波を受け昭和 17 年に閉鎖されましたが、素峰が生涯を捧げた児童愛護事業の足跡は、戦後の病弱・虚弱児教育や今日の児童福祉施設の発展につながる源流となっています。

わらべ

童が丘の「雀のお宿」正門と野田素峰さん



童ヶ丘「すゝめのおやじ」正門と素峰さん



長女を抱く素峰さん（雀のお宿正門前）

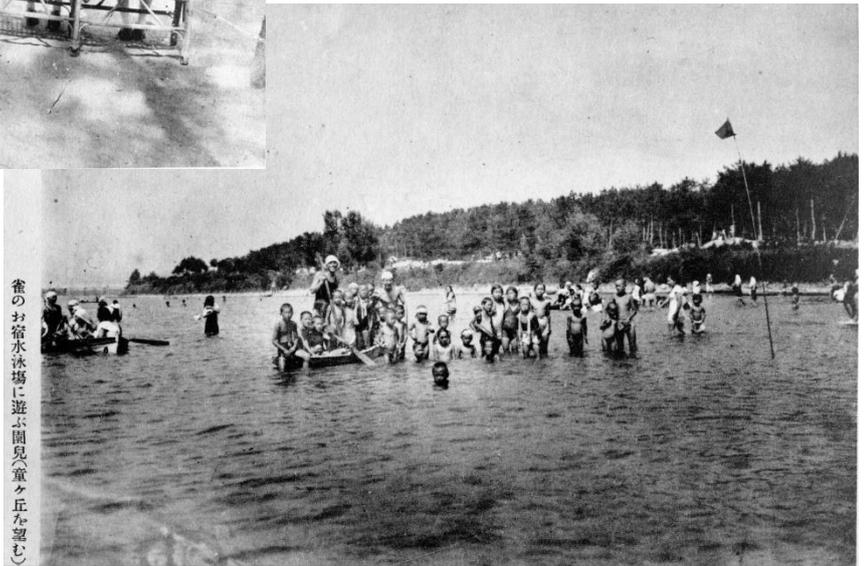


木曾川町里小牧（昭和2年～昭和11年）



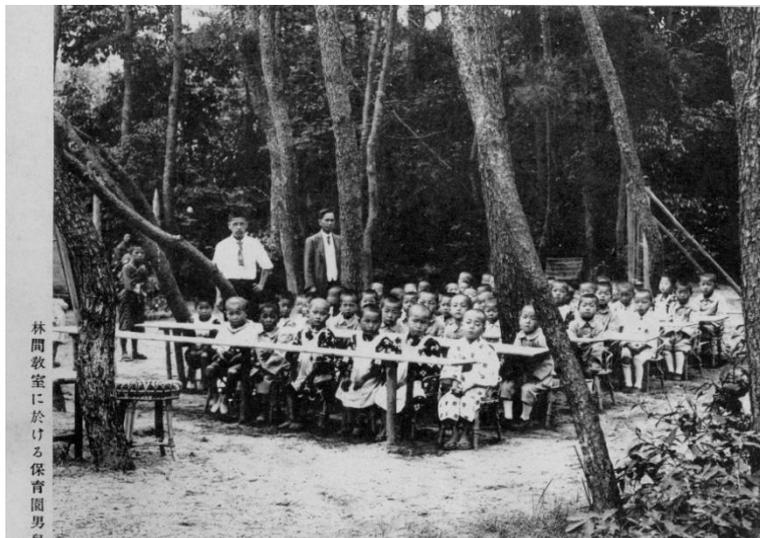
林間教室に良寛さまのお話を聞く園児

林間教室に良寛さまのお話を聞く児童



雀のお宿水泳場に遊ぶ園児(童ヶ丘を望む)

雀のお宿水泳に遊ぶ児童
(童ヶ丘を望む)



林間教室に於ける保育園男児

← 林間教室に於ける保育園男児



林間教室に於ける保育園女児

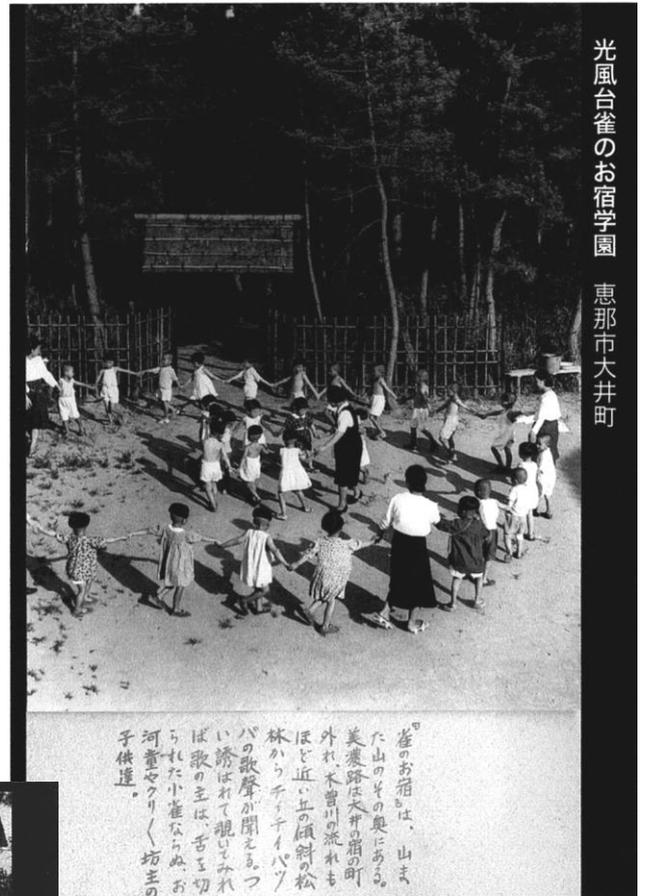
林間教室に於ける保育園女児 →

25-1 「雀のお宿」

恵那市（昭和 11 年～昭和 17 年）

右図

『雀のお宿』は、山また山のその奥にある。美濃路は大井の宿の町外れ、木曾川の流れもほど近い丘の傾斜の松林からチイチイパッパの歌聲が聞こえる。つい誘はれて覗いてみれば歌の主は、舌を切られた小雀ならぬ、お河童やククリ坊主の子供達

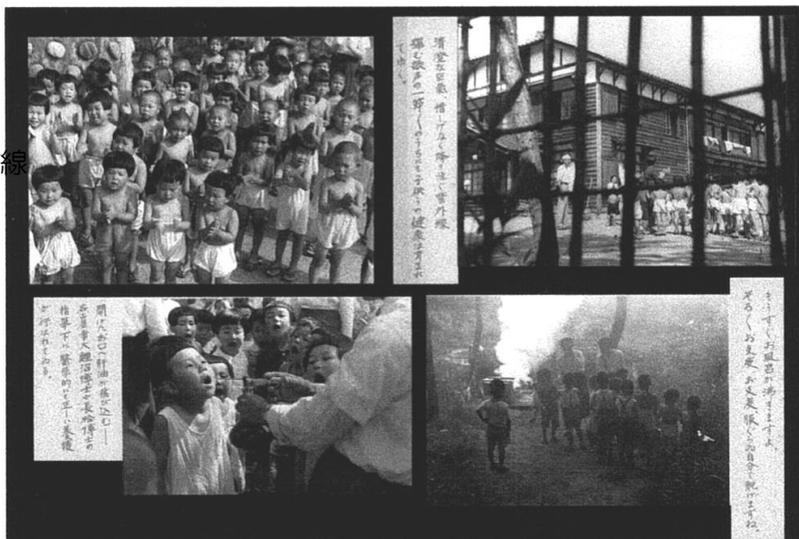


雀のお宿は、山また山のその奥にある。美濃路は大井の宿の町外れ、木曾川の流れもほど近い丘の傾斜の松林からチイチイパッパの歌聲が聞こえる。つい誘はれて覗いてみれば歌の主は、舌を切られた小雀ならぬ、お河童やククリ坊主の子供達。



左図

- 上 雀のお宿にも夜が来た。聞こえるものは遠いせせらぎと松風。子供たちの快く疲れた身体を大自然は深く懐に入れてくれる。
- 右 生れて初めて、お家を離れてのねんね。このことが子供の自身力と独立心を養い効果は絶大なものがあるといふ。
- 左 大井町からお宿まで、送り迎えのお伽馬車・・・町の子供にとっては嬉しい夢の實現である。



左図

- 上 清澄な空気、惜しげなく降り注ぐ紫外線 弾む歌声の一節一節のうちにも子供らの健康は育まれてゆく。
- 右 もうすぐお風呂が沸きますよ。そろそろお仕度、お仕度、服ぐらみ自分で脱げますね。
- 左 開けたお口へ肝油が飛び込むー名古屋帝大鯉沼博士や長松博士の指導の下に医学的にも正しい養護が行はれてゐる。



単純なことを反復して飽きないのは子供の本性だ。
エッチラオッチラ梯子を登りスゥスと下っては、
また昇る。知らず識らずの間に行はれる適度の
全身運動である。

守り本尊の良寛様に、
朝夕手を合わせて一



ほらお魚、お魚—
あつ逃げちゃった—
子供らは還る
野の子に、自然の子に

學園のすぐ下は阿木川の清冽な流れだ。
保母に連れられて、午後の水浴びに一

25-2 柳原白蓮・北原白秋・竹久夢二など

「竹深亭」(掬水精舎前栽より望む)
「掬水園」(雀のお宿)

ろうかんぞう
「琅玕荘」と子供図書室及び沙上教室



北原白秋

柳原白蓮



柳原白蓮・名取春仙

竹久夢二



26. 木曾川町の神社と寺院

神 社

神 社 名	祭 神	場 所	神 社 名	祭 神	場 所
籠守勝手神社 <small>こもりかたて</small>	よどひめのみこと 淀比咩命 せおりつひめのみこと 瀬織津比咩命	黒 田	若 宮 社	おうじん 応神天皇	外割田
白 山 神 社	おおなむちのみこと 大己貴命 くくりひめのみこと 菊理姫命	黒 田	すさのおのみこと 素戔嗚尊神社	すさのおのみこと 素戔嗚尊	外割田
し ん め い 社 神 明 社	あまてらすおおみかみ 天照大神	黒 田	し ゃ く う し 社 社 宮 司 社	天照大神	外割田
く ま の 社 熊 野 社	いざなぎのみこと 伊弉諾尊 いざなみのみこと 伊弉册尊	黒 田	か も 神 社 賀 茂 神 社	たまよりひめ 玉依姫 かものわけみかづちのみこと 賀茂別雷命	玉ノ井
い ぶ り べ 社 伊 富 利 部 神 社	わかつほのみこと 若都保命 ほんだわけのみこと 誉田和気命	門 間	秋 葉 社	かぐつちのみかみ 迦具土神	玉ノ井
ほ こ つ か 社 鉾 塚 社	天照大神	門 間	み つ の り 社 三 法 神 社	すさのおのみこと 素戔嗚命	三ツ法寺
に し み や 社 西 宮 社	あめのひるこのみこと 天蛭子命	門 間	う ぶ す な 社 宇 夫 須 奈 神 社	い お き ひめのみこと 五百木姫命 いぢきしまひめのみこと 市杵島姫命 いざなぎのみこと 伊弉諾尊 いざなみのみこと 伊弉册尊	里小牧
こ こ く 社 護 国 神 社	日清戦争以降の戦争で亡くなった人 四三五柱	内割田			
て ん し ん 社 天 神 社	おおなむちのみこと 大己貴命	内割田	神 明 社	天照大神	里小牧

寺 院

寺 名	宗 派	場 所	寺 名	宗 派	場 所	寺 名	宗 派	場 所
かわのぜんりゅうじ 河野善龍寺	真 宗	黒 田	かんのんじ 観 音 寺	浄 土 宗	黒 田	こうしょうじ 高 照 寺	臨 濟 宗	外割田
けんこうじ 劍 光 寺	臨 濟 宗	黒 田	しゅうようじ 秋 葉 寺	曹 洞 宗	黒 田	もんぼうじ 聞 法 寺	真 宗	外割田
ほうれんじ 法 蓮 寺	日 蓮 宗	黒 田	いかくじ 以 覺 寺	真 宗	門 間	さんぼうじ 三 宝 寺	天 台 宗	外割田
ほうこうじ 宝 光 寺	臨 濟 宗	黒 田	ふくしょうじ 福 昌 寺	臨 濟 宗	門 間	ねんぎょうじ 念 敬 寺	真 宗	玉ノ井
さいれんじ 西 蓮 寺	浄 土 宗	黒 田	そくじょうじ 速 成 寺	真 宗	門 間	しゃかじ 釈 迦 寺	臨 濟 宗	玉ノ井
じょうりきじ 定 力 寺	真 宗	黒 田	さいれんじ 西 蓮 寺	臨 濟 宗	門 間	ようがんじ 養 願 寺	真 宗	里小牧
みょうくんじ 妙 君 寺	日 蓮 宗	黒 田	ほうりんじ 芳 林 寺	曹 洞 宗	内割田	しんごんじ 真 言 寺	真 言 宗	里小牧

27. 木曾川町の文化財

【指定文化財】

〈有形文化財〉

〔建造物〕

市 賀茂神社古神門（賀茂神社）

〔絵画〕

市 跳鯉 川合玉堂筆（玉堂記念木曾川図書館）

市 籠守黒田大明神本地之像（籠守勝手神社）

市 水墨山水図 川合玉堂筆（玉堂記念木曾川図書館）

〔彫刻〕

市 能面一對（男面・女面）（賀茂神社）

市 鬼神面（賀茂神社）

市 鬼神面（賀茂神社）

市 女面（賀茂神社）

市 木造僧形坐像（賀茂神社）

市 木造千手観音立像（釈迦寺）

市 木造十一面観音立像（釈迦寺）

市 木造聖観音立像（釈迦寺）

市 木造狛犬（伊富利部神社）

〔工芸〕

県 鬼神面（賀茂神社）

市 天目茶碗（法蓮寺）

市 鍔口（籠守勝手神社）

市 忍者刀（籠守勝手神社）

市 刀剣（白山神社）

市 笹鎗（籠守勝手神社）

市 刀剣（賀茂神社）

市 刀剣（賀茂神社）

市 古鏡（賀茂神社）

市 古瀬戸茶入れ（宝光寺）

市 鍔口（釈迦寺）

市 神鈴（賀茂神社）

市 古鏡（菊花散双雀鏡）（賀茂神社）

市 古鏡（瑞花蝶双鳳凰鏡）（賀茂神社）

市 古鏡（瑞花双鳳凰八稜鏡）（賀茂神社）

市 古剣（鉄剣残欠）（伊富利部神社）

市 親獅子（伊富利部神社）

市 親獅子（伊富利部神社）

市 鍔口（伊富利部神社）

市 甲冑 伝 一柳直盛所用（伊富利部神社）

市 金灯籠（伊富利部神社）

〔書籍・典籍〕

市 日相上人墳墓記一卷（法蓮寺）

市 扁額「八剣神社」川合玉堂筆付玉堂書簡
（玉堂記念木曾川図書館）

〔考古資料〕

市 四耳壺（里小牧）

〈民俗文化財〉

〔有形民俗〕

市 神楽獅子屋形（里小牧）

〔無形民俗〕

市 神楽獅子芝居（里小牧）

〈記念物〉

〔史跡〕

市 澤井公屋敷跡（黒田）

市 善光寺跡（黒田）

市 玉ノ井清水（賀茂神社）

市 黒田城跡（黒田）

市 山内但馬守盛豊、十郎父子の墓（法蓮寺）

市 伊富利部古墳（伊富利部神社）

市 里小牧渡船場跡（里小牧）

【登録有形文化財】

〔建造物〕

国 木曾川資料館主屋（旧木曾川町会議事堂）

国 木曾川資料館収蔵室（旧木曾川町役場倉庫）

28. 方言と共通語比較

方言	共通語	方言	共通語	方言	共通語	方言	共通語
あいさ	あいだ	おいた	やめた	きがづつない	気づまり	ごんぼ	ごぼう
あかすか	だめです	おいでやす	おいで遊ばせ	・・ぎし	・・だけ、ばかり	さいなら	さようなら
あからかす	こぼす	おうじょうこく	困る	きちっと	きちんと	さきっぽ	先
あがりゃあ	上がりなさい	おきんさい	やめなさい	きつつきらい	大きらい	さっきがた	先ほど
あかん	だめ	おくんさい	ください	きむい	きゅうくつ	さびい	寒い
あけせん	いけない	おこわ	強飯	きやす	消す	しいし	汁
あのよう	あのねえ	おじゃみ	お手玉	きゃあもん	買物	しぶち	時雨
あやすい	やさしい	おそがい	おそろしい	ぎょうさん	たくさん	じっきに	すぐに
あよぶ	歩く	おとらかす	落とす	きんのう	きのう	じべた	地面
あんばい	具合・病	おば車	うば車	ぐずる	駄々をこねる	しまっとく	片づけておく
あんね	姉さん	おぶ	負う	くそたわけ	大ばかもの	じょじょ	そうり
いかっせる	行きなさる	おまはん	あなた	くたぶれる	くたびれる	じょり	そうり
いきゃあ	行きなさい	おもたい	重い	くど	かまど	すかくう	あてがはずれる
いこまい	行きましょう	およくる	いじめる	けっからかす	けりちらす	ずつない	せつない・苦しい
いしな	石	おれせんきゃ	おりませんか	けったくそ	縁起	すべくる	すべる
いっしょくた	混同	おんし	おまえ	けなるい	うらやましい	せいとる	びっしり
いっつか	すでに	おんなじ	同じ	けぶたい	けむい	せく	急ぐ
いやがらかす	いじめる	おんぼ	尾(お)	こえせん	来ません	せせくる	いじる
いりゃあ	おいでください	かええ	かゆい	こく	言う	せわない	簡単
いろむ	色づく	かたくろ	片すみ	こそぐる	くすぐる	そうかなも	そうですね
いわした	言われた	かたちんば	びっこ	ごっさま	おかみさん	そうそと	そっと
うざる	しかる	かねする	許す	こっちゃべた	こちらがわ	そうれん	葬式
ええか	良いか	かやかや	明るい	こないだ	この間	そっちゃべた	そちら側
えっとう	久しく	からかす	枯らす	こぼらかす	こぼす	それみやあ	それごらん
えらい	つらい	かんす	蚊(か)	ごめやあす	ごめんください	そんやで	それだから
えろう	たいそう	がんち	片目	ころっと	すっかり	だいこ	大根

方言	共通語	方言	共通語	方言	共通語	方言	共通語
だいたる	だいてやる	どだい	まったく	びっしり	一面に	もっさらこい	乱雑な
たいもない	大へんな	どべ	びり	ひとつんつ	一つずつ	やあこい	やわらかい
だかえる	抱く	どもならん	どうにもならない	ひや	火葬場	やけずり	やけど
だだくさ	粗末	とらます	捕える	ひょうける	おどける	やせほせ	やせて細い
たわけ	ばか	とろくさい	ばからしい	ぶくり	高下駄	やっとかめ	久しぶり
だんだ	風呂	どんかえる	倒れる	ふすべ	ほくろ	やっこさ	ようやく
たんと	たくさん	なでくる	なでる	ふんと	ほんとう	やっぱし	やはり
たんび	たびに	なすび	なす	べえ	いや	やらしい	はずかしい
ちゃっと	急いで	なにやとったあ	何をしていたか	へたくそ	下手	やれえせん	できない
ちゃんと	必ず	なんちゆう	なんという	へっつける	つける	やれん	あげない
・・・ちょう	・・・下さい	なんで	なぜ	へらかす	へらす	やわこい	やわらかい
ちょうすく	自慢する	にすい	にぶい	べろ	舌	ゆかっせる	行きなさる
ちょうける	おどける	ぬかす	言う	へんび	へび	ゆこまいか	行きましょう
ちょこっと	少し	ぬくとい	あたたかい	ぼうやあ	鬼ごっこ	ゆんべ	昨夜
ちょろまかす	ごまかす	ねしな	寝る前	ほかる	投げる	ようさ	夜
つんばり	支柱	ねぶか	ねぎ	ほじくる	掘る	ようけ	たくさん
でかす	つくる	ねぶたい	眠い	ほしたら	そうしたら	ようやってちょうた	よくやってくださった
できすか	できるものか	のうなった	なくなった	ほれから	それから	よこた	横
ですこ	おでこ	のぐ	ぬぐ	まあはい	やがて	よっぽど	よほど
でんがらかす	倒す	はがええ	はがゆい	まぜてくれ	仲間にしてくれ	よばる	まねく
でんち	胴着(どうぎ)	はきもん	はきもの	まっかしけ	真っ赤な	よわたた	困った
どいて	のいて	はたご	織機	まるくたい	丸い	りょうおる	料理する
どうじゃあも	どうですか	はったろか	なぐってやろか	まわし	準備	ろくさま	ろくろく
どうぞこうぞ	どうかこうか	ばんげ	夕方	まんだ	まだ	わかっちょる	分かっている
どごすい	悪がしい	ばんこ	手あぶり火鉢	みやあ	見なさい	わし	私
どこぞかんぞ	どこかに	ひきずり	すき焼き	めめぞ	みみず	わしんどこ	私の家
どすく	なぐる	ひっころがる	ころがる	めんどみる	世話をする	わらかす	わる

笠松町

更屋敷

光明

位置図



No	名称	No	名称
④	二重堤防	⑮	JR 木曾川駅
⑥	伊富利部神社	⑯	名鉄新木曾川駅
⑦	籠守勝手神社	⑰	旧国道 22 号
⑧	賀茂神社	⑱	国道 22 号
⑨	護国神社	⑲	銀座通り
⑩	河野善龍寺	⑳	町役場
⑪	法蓮寺	㉑	小・中学校
⑫	宝光寺	㉒	消防署
⑬	黒田城跡	㉓	木曾川病院
⑭	門間の野井戸	㉔	雀のお宿

木曾川町玉ノ井

木曾川駅

宮木曾川

玉ノ井駅

木曾川町門間

国土地理院の電子地形図（タイル）に神社、寺院等の位置図を追記して記載

奥町